

部位の疼痛緩和がみられた。HRPC に対する治療として DCT の投与は有効であると考えられた。

9. ヘパリン起因性血小板減少症 (HIT) の一症例

廣野 正法, 久保田 裕, 栗原 潤

(原町赤十字病院 泌尿器科)

症例は 87 歳男性。慢性腎不全で当科外来フォローしていたが、尿毒症症状で H17 年 1 月 15 日から HD 開始した。1 月 22 日より透析回路内に凝血塊が多発し、採血にて血小板減少、回路内圧の上昇を認めたため HIT と診断し、ヘパリン投与を中止して抗凝固剤をアルガトロバンに変更したところ回路内凝血、血小板減少は改善した。抗凝固剤変更の時点で抗 PF4-ヘパリン複合体抗体の採血を提出し、陽性であったため HIT との診断に至った。その後 HD 中に HIT によると思われる狭心症発作起こしたため現在は腹膜透析をしており大きな問題は生じていない。HIT は血小板そのものによる凝固亢進作用、抗 PF4-ヘパリン複合体抗体による血小板刺激によって凝固能が亢進する疾患であり、疑った時点でヘパリン使用を中止して代替の抗凝固剤を使用する必要がある。また抗 PF4-ヘパリン複合体抗体は時間が経過すると陰性になるため早期の検査が望まれる。

10. 膀胱癌肺転移に対する second line chemotherapy として TCG 療法を施行した 2 例

岡本 亘平, 大木 一成, 武智 浩之

柏木 文蔵, 小池 秀和, 伊藤 一人

鈴木 和浩 (群馬大院・医・泌尿器病態学)

今回我々は M-VAC 療法施行しても肺転移巣が増大した膀胱癌肺転移の 2 例に対し TCG 療法 (Paclitaxel Cisplatin Gemcitabine) を施行した。プロトコールは 21 日毎のサイクルで Day1 と Day 8 に Paclitaxel 60mg/m², Gemcitabine 800mg/m². Day 2 に Cisplatin 70mg/m² とした。【症 例】 56 歳男性と 63 歳男性。どちらも根治的膀胱全摘+ハウトマン型代用膀胱造設施行後に肺転移が生じ、M-VAC 療法を施行したものの転移巣の増加・増大がみられたため TCG 療法 3 コース施行した。一部の病巣で中心部の空洞化、縮小がみられ、増大はなかった。【有害事象】 好中球減少 Grade 4, 血小板減少 Grade 2 がみられたが、消化器症状は Grade 0~1 で、M-VAC 療法に比べ患者の苦痛は軽度であった。TCG 療法は尿路上皮癌に対する first line chemotherapy として、M-VAC より有効であるとの報告がある。second line の治療として確立したものは無いが、現在は Gemcitabine やタキサン系薬剤を用いた報告が多数あり、より奏効率の高い、患者の QOL の高い治療が求められており、TCG 療法もその一法として期待される。

11. 末期尿管癌の消化管閉塞に伴う消化器症状に対し酢酸オクトレオチドが著効した 1 例

新田 貴士, 奥木 宏延, 岡崎 浩

中村 敏之 (館林厚生病院 泌尿器科)

51 歳男性。尿管癌術後再発により、消化管閉塞を来とし、腹痛と激しい嘔吐を繰り返した。胃管を挿入し酢酸オクトレオチドを、200μg/日で持続皮下注射開始したところ、翌日より嘔気が消失した。胃管からの排液量も著明に減少したため、胃管も抜去できた。インフューザーを使用し継続投与しながら 2 度の外泊も可能であった。酢酸オクトレオチドは、消化管閉塞を伴う末期癌患者の QOL を向上させうる薬剤として、大いに期待できる。

<セッション III>

座長 岡崎 浩 (館林厚生病院)

ビデオ症例

12. 後腹膜鏡下腎摘除術の経験

野村 昌史, 羽鳥 基明, 柴田 康博

岡本 亘平, 伊藤 一人, 鈴木 和浩

(群馬大院・医・泌尿器病態学)

小林 幹男 (伊勢崎市民病院 泌尿器科)

2005 年に 4 例の後腹膜鏡下腎摘除術を施行した。1, 2 例目は出血のため開腹術に移行。主な原因として、腎莖部処理の時点で術者が一方の手を腎の挙上に使用するため、剝離操作が片手になってしまうことが考えられた。片手操作では十分な視野を得られず、出血などのリスクが高くなる。また腎動静脈のクリッピング操作などの際も、両手での操作が可能であれば、安全また確実に処理が行える。その後、助手用の 3 本目の操作ポートを早期に挿入するなどの改善を加え、3, 4 例目の症例では後腹膜鏡下に手術を施行可能であった。良好な視野の確保および、術者の両手を自由にすることが重要と思われた。

臨床的研究

13. 群馬県立がんセンターにおける腎癌症例の臨床的検討

濱野 達也, 松井 博, 清水 信明

(群馬県立がんセンター 泌尿器科)

1972 年から 2005 年 8 月までに当院で診断された腎癌症例 164 例について検討した。初発症状では最近 15 年間で偶発癌の割合が 50%を超えておりそれ以前の約 12%と比べ大幅に増加した。生存率をみても偶発癌は症候癌にくらべて有意に良好であった (5 年生存率 85.8% vs